

~~~~~  
書 評  
~~~~~

松井健著

『自然の文化人類学』

東京、東京大学出版会、1997年
213頁、3,200円

書 豊*

「自然」に関する問題系は、人文・自然科学という枠組みを超えた環境学のなかで、すでに重要な地位を占めている。そのような状況のもと、本書は「自然の文化人類学」と題するように、「自然」に関する問題系を、基本的に文化人類学の領域から解きほぐそうとした著作である。ただし、本書では「自然」そのものというよりも、「自然」と文化、あるいは「自然」と人間のかかわりに、より比重がかけられている。また、本書は、タイトルに「自然」という言葉を含むものの、そこでは実体としての「自然」とどまらず、「自然」という言語記号により喚起されるイメージまでも取り上げている。

著者は、本書の冒頭で、著者の思考の拠り所を鮮明にするため、ふたつの主張をあらかじめ明示している。

まず第一に、著者は、「自然」という概念がけっしてア・プリオリに普遍的な意味を担っているものではない、と主張する。これは、「自然」という概念が、あくまで文化的なものであることを指し示す。「自然」の概念は、それぞれの民族集団によって独自の文化装置として用いられ、個別に文化的に画定され、独自に彩色されたものとして扱われるべきものなのである。このことを著者は、「文化のなかに自然が埋め込まれている (embed-

ded)」(p.ix)と、K・ボランニー流にわかりやすく表現してくれる。われわれが感じ、把握できる「自然」が、グローバルな位相において普遍的であろうはずはないのである。

本書のなかでも指摘されるところであるが、1980年代、人類学にとどまらずさまざまな思考の領域において、文化と「自然」を2項対立的な構造に仕立てたやり口で、すべての事象を読み解こうとする風潮が席巻した。そこでは、「自然」の存在は、何ら疑義の挟まれることのない存在であり、その構造は普遍的に適用可能なグローバルなものとして語られた。しかし、今から考えると、そのような議論は、知的遊戯として人々を興奮させた以外、何ら確からしい世界像を描いてはこなかった。むしろ、地球全体が、まったく同じ構造で仕立てられているかの如き、大きな誤謬と思考停止に陥れた遊戯は、人間生活の多様性や実体性から文化人類学を乖離させ、ますます「自然」というものを議論の場から退却させる役割を果たしたようである。本書は、そういう「自然」の問題を、文化人類学の肝要な課題として、再び蘇生させる役割を果たそうとする。

著者の、以上のような第一の主張にしたがうならば、次に「自然」という枠組み自体の必然性、自明性に関しても疑いをもたねばならない。これが、著者の第二の主張である。簡単にいって、第一の主張のように、ある人間集団が「自然」として括りあげる範疇は、地球全体に敷衍可能な範疇ではないのであるから、「自然」という言葉で指し示される概念の様相や、イメージのおよぶ範囲は自明ではなく、また「自然」という言葉で置き換える必然性もないのである。たとえば、実体としての「自然」に強く引きずられる場合があるとすれば、また、「自然」の概念が、われわれの想像でできる枠を乗り越える場合すらある。そのようななか、著者は、「自然」という1語で語り続ける困難さ、不自由さを感じつつも、最終的には「自然」概念が生み出すイメージの多岐にわたった豊かさ、ふくよかさというものを全体としてすくい上げる必要性を主張するのである。

本書は、第1章「文化人類学における一九二二

年の問題」、第2章「人類学的「自然」」、第3章「ドメスティケーションの「自然」観」、第4章「自然と文化のカレードスコープ」、第5章「身体という回路」、第6章「コスモロジーの構築術」、第7章「想像的なもののリアリティー」の7章からなっている。一見、分断された主題が纏められたアンソロジー風の構成になっているが、諸論考の底流には、先に示したような著者の主張が一貫して流れており、熟読すれば著者の意図するところは明らかである。

著者は、大きく3部のまとまりから、「自然」の問題系へアプローチした。まず第一のまとまりでは、人類学的営為のなかで、人間と「自然」のかかわり方を総体として論じるための理論装置を探索する学説史の整理に著者は取り組んでいる。これには、第1、2章があてられている。

第1章は、「現今の文化人類学、社会人類学、民族学という分野において、「自然」という題目はまったく忘れ去られている」(p.1)という、痛烈な批判からはじまる。著者は、この「事実」を証明するために、近代的な文化(社会)人類学(以下、文化人類学と総称する)成立期の巨視的な学説史検討と、個別研究者の志向の微視的検討の往復作業を行うことから着手した。この作業では、まず1922年を近代文化人類学の大きな画期となした、マリノフスキーとラドクリフ=ブラウンのふたりのモノグラフについて、その理論的な意味を問いなおしている。

著者は、マルクス研究に適用されたアルチュセールの「認識論上の切斷」という方法概念をふたりの業績批判に援用する。その結果、この近代文化人類学の成立に大きく寄与したモノグラフは、調査方法と調査結果との独特の重合の仕方において高く評価できるが、これをもって新しい理論と方法論の成立と措定しうるほどに強い独自性は認められないという。つまり、認識論上の断絶は、認められないのである。

では、彼らはいったい文化人類学の流れのなかに何をもちらしたのか。著者は、両者ともに自然科学をモデルとする理論化傾向の源泉となっているものの、逆に、孤立小社会において親族、政

治、儀礼、宗教などの諸要素が緊密に機能的連関をもってまとまっているという強いステレオタイプを生み出したと批判する。その結果、「自然」とかかわる文化の領域で見逃せない環境、生業、物質文化、技術という要素は、社会的な要素の背後にあるものとして研究の相対的比重が失われた。つまり、1922年に世に問われた民族誌は、意図せずして文化人類学の視野を狭窄し、「自然」という題目を見失わせていった、と著者は批判する。

一方、第2章では、ボアズとデュルケイム、およびモースを中心とし、さらに生態人類学、構造人類学、認識人類学の可能性と問題点を付加しながら、学説史を整えていく。第2章で取り上げられた研究者、研究分野が残した方法、理論については、前章で取り上げた機能主義者に比べ、「自然」への取り組みの面からいってはるかに評価されるものとする。しかし、それは、著者にとって、1922年の問題同様、「自然」に向けた方法論として、未来の文化人類学に連なって十分意味のあるものではないようである。

著者は、迂遠なまでの詳細な学説史検討を展開した。だが残念ながら、批評方法の強引さや、また批評素材の選択の恣意性において批判されかねないこのレビューによってすら、著者は、人間と「自然」とのかかわり方を総体として論じるための明確な理論装置を、文化人類学のなかに、探し当てることはできなかった。それほど、文化人類学において「自然」を全体的に対象化していく方向性は、忘却されてきたのである。しかし、この結果は、一方において、著者自身を自らのセオリーで、総合的な「自然」の問題の検討に駆り立てることになる。

駆り立てられた著者が、次に取り組んだ課題は、実体としての「自然」と人間とのかかわりの問題である。これに第3、4章が割り振られ、本書の第二のまとまりを構成する。

著者の目指す方向性からいって、ここに登場する「自然」は、人間と切り離されて存在するものではなく、人間と密に関係を取りもってきたものであることは、至極当然である。第3章で試みられたドメスティケーション論は、まさに人間に

* 東京大学

よって形作られた動・植物を問題にしている。

野生動物の家畜化、野生植物の栽培化などドメスティケーションの過程に関する問題は、著者がここ数十年を深く取り組んできた課題であり、すでに著書『セミ・ドメスティケーション』[松井, 1989]で仮説の理論的検討がなされている。1種ないし数種の生物種と人間との濃密な関係すなわちセミ・ドメスティケーションの段階が、最初のドメスティケーションを生み出すための必要条件とする仮説は、本書第3章前半で再び素描される。そして、ドメスティケーション以前と以後を比較し、ドメスティケートされた動・植物の特質の連続性に関して、ヨーロッパ社会と連なる西南アジアは非連続的であるのに対し、東南アジアは連続的であることが指摘される。

この指摘は、「家畜化の過程」への視角としては、著者が数十年来主張していることであり、これだけでは新味に欠けるが、著者はこれを次の段階へと昇華させる視点を、第3章の後半で周到に用意している。そこでは、著者の視角が、ドメスティケーション論から、通文化的「自然」観の問題へと、すでに離脱していることが示される。

著者は、東南アジアと西南アジアのドメスティケーションの連続・非連続性の問題や、口承伝承などを用い、それぞれの「自然」観のあり方の違いを説明している。つまり、西南アジアやその生業文化を継承したヨーロッパ世界では、人間と動物の分離の度合いが強い、きわめて系統的な反「自然」主義が存在するのに、東南アジアでは人間と動物の分離の度合いが低いということである。西欧と東洋には大きな「自然」観の違いが存在するのである。

このような、自覚的に単純な図式にまとめ上げた著者の主眼は、実は「自然」観そのものにあるのではない。その「自然」観をもとに、「自然」を取りまく、さまざまな実践的、今日的諸課題が解決されなければならない、というところに主眼は定められているのである。簡単にいって、現在の「自然」保護、環境保全などの取り組みは、すべてが欧米の力と思想にのっとったものであり、地球上の多様な「自然」のあり方に、一元的にしか

対応していないということである。ドメスティケーションから探り出す「自然」観が、今日的な実践的な課題に、深い影響をおよぼしていることを確認し、実践を無自覚に価値あるものとする人々に対して、反省を促すことを目的として、本章は編まれたのである。

引き続き第4章は、3章の問題を解き明かすための実体に立ち返った部分であり、本書のなかでもっともモノグラフらしい展開となっている。そこで描かれたナツメヤシ・オアシスにおけるナツメヤシと、住民の濃密な関係性をみると、著者の主張する「自然」観の多様性と、人間と「自然」の絡まり合いの重要性はより一層明瞭になる。

第5章以降は、第三のまとまりである。そこでは、「身体」、「コスモロジー」、「想像力」という言葉をキーワードにし、「自然」という言語記号により喚起されるイメージを問題にしている。

第5章では、「身体」が、「自然」と文化の交錯するもっとも生き生きとした場であり、文化を受容する「自然」、あるいは文化の深層としての「自然」のもっとも手近なモデルとして「身体」があることを、儀礼や言語行為をもとに明らかにしている。ついで、第6章では、世界の「コスモロジー」が3類型に分けられるものの、いずれにおいても、「コスモロジー」を組織化する際に準拠する枠組みや参照の系に、輪郭のはっきりした「自然」なるものが選ばれていることを示した。さらに、第7章ではこの考えを受けて、騙し絵やシュルレアリストの画業、怪物騒動などを題材にして、空想という人間に自由に解き放たれた活動すら、その根元の基質には「自然」というものが横たわっていることを明示した。

最後の3章から、「自然」という概念のもっとも意外な、そして本源的な重要性が、実在としての「自然」とは、遠いところに立ち現れる「自然」のなかに、むしろはっきりと開示されることがある、ということが理解される。そして、著者の主張、すなわち「自然」の概念は、ア・プリオリに普遍的な意味を担っているものではなく、さらに、この枠組みの自明性や必然性というものも、何ら証明されていない」という主張は、ここにき

て見事に証明されることとなる。

以上みてきたように、本書は「自然」という問題系に、文化人類学を引き寄せするのに十分な力をもっている。少なくとも、そこに鍛められた思考の束は、今日的な「自然」の問題系に新しい視点や、議論のきっかけを与えてくれることであろう。

ただし、そのあまりにも構図的に明瞭すぎるくらい、たとえば第4章のブルーチュの民族誌と第6章のコスモロジーの考察部分は、古典的に美しい「本質主義」を彷彿とさせる。少なくとも、現代の多くの文化人類学者たちの眼には、「本質主義」でペダンティックな作業と映るであろう。しかし、著者は、そのような文化人類学者から批判を受ける危険性を百も承知の上で、古典的な美しい作業を、冷笑的にあえてやり遂げたようである。それは、著者が文化記述とその焦点において、きわめて多様な設定が可能であると考えているからである。しかし、現状はというと、文化人類学は、かなりの部分で多様な設定に不寛容になってしまった。こういった、文化人類学の現状に対する異議申し立ての書として本書が提示されていることにも、われわれ読者は気づかなければならないのであろう。

参考文献

松井健

1989 『セミ・ドメスティケーション』海鳴社

末成道男著

『ベトナムの祖先祭祀—潮曲の社会生活』

初版、東京、風響社、1998年

446頁、本体15,000円

瀬川昌久*

本書は、極めてオーソドックスでおとなしいそのタイトルとは裏腹に、非常に挑戦的な意図を有する野心作である。ただし、著者の挑戦のもつ意味を正確に認識できる読者は、必ずしもそれほど多くないかもしれない。あくまでも通り一遍に読んだ限りでは、本書はオーソドックスな村落調査に基づくオーソドックスな村落モノグラフであり、植民地主義やジェンダー、グローバリゼーション、伝統の創出、文化の再定義など、人類学における「先端的」テーマを扱った専著ではない。各章で扱われている具体テーマも、村落の地理・沿革・組織、年中行事、家族、親族、人生儀礼など、いわゆる文化・社会についてのホリスティックなモノグラフの体裁を示しており、潜在的読者の中には、新刊書としてはいささか時代錯誤的なまでに正統派スタイルの著書であると見なして敬遠してしまう者もいないとも限らない。しかしながら、人類学全体が大きな曲がり角、あるいは行き詰まりと言ってもよい状況にある現今、逆に本書のような研究こそがこの種の研究分野の真の醍醐味を伝えるものであることを、著者はわれわれに訴えかけようとしている。

本書のもつ意義、それは以下の二点に要約できる。第一は、フィールドワークや民族誌の叙述の客観性について否定的・批判的にとらえる傾向の強い近年の議論に対し、それを乗り越える方法を確立しようとしている点。第二は、ベトナムという対象そのもののもつ新鮮さ、目新しさに立脚しつつ、それを東アジアの他の社会と比較することにより、従来の個別社会研究がもたらし得なかった各々の社会の特徴といったものを明確にしようと努めている点である。

まず第一の点について、著者自身は本書の序文の中で次のように述べている。「……最近の人類学にみられる、人類学的調査や記述自体を問題とし、伝統の創造といった現代的現象に関心をよせる一部の傾向は、過去の社会の歴史変化の過程や現在進行中の伝統の変化といった現象の究明に十分応えられない恐れがある。つまり、ひとつの社会を諸要素の関連しあった統合体として見る総合的モノグラフが流行らなくなり、しかも記述その

* 東北大学

編集委員 (63巻, 64巻担当)

谷 泰 (主任)

落合一泰

合田 濤 (書評主任)

高谷紀夫

渡辺公三

春日直樹

鈴木 紀

鷹木恵子

茜谷嘉章

Paul SNOWDEN (欧文)

◎編集事務

(〒108-0073) 東京都港区三田2-1-1-813 日本民族学会

編集事務局 須山 実 自宅電話03(3793)9719

◎入会申込・会費 (年8,000円, 前納制) 納入その他のご連絡は, 学会事務局の方へおねがい致します。

◎バックナンバーは実費 (送料別) にてお頒ちしております。

◎学会事務局は, 下記の通り開いております。

(〒108-0073) 東京都港区三田 2-1-1-813

日本民族学会事務局 田 中 陽 子

TEL 03 (5232) 0920 FAX 03 (5232) 0922

郵便振替 00100-1-22345 E-mail hoya @t3. rim. or. jp

<http://www.soc.nacsis.ac.jp/jse/>

月・火・木・金 10:00-5:00

平成11年12月30日発行 (季刊) 頒価2,100円 円150円

民族学研究 第64巻 第3号

編集兼 日本民族学会

発行所

東京都港区三田2-1-1-813

発行者 会長 松園 万亀雄

編集代表者 谷 泰

印刷所 株式会社 スギタ 杉田屋印刷事業部

東京都文京区白山2-18-9

本誌出版費の一部として, 文部省より科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) の交付を受けております。